



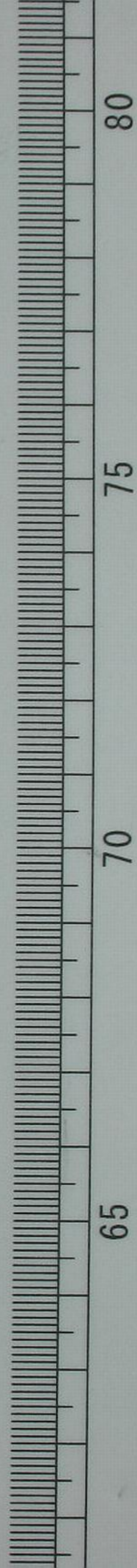
俗通

渡邊義方編輯

日本小史

第五編

上



A 557

9

染崎延房檢閲
渡邊文京探觚

梅堂國政畫

通 俗
日本小史

東京書肆

金松堂發兌

48-8440

日本小史の編輯

あるふと代々

乃の所まき

たのり



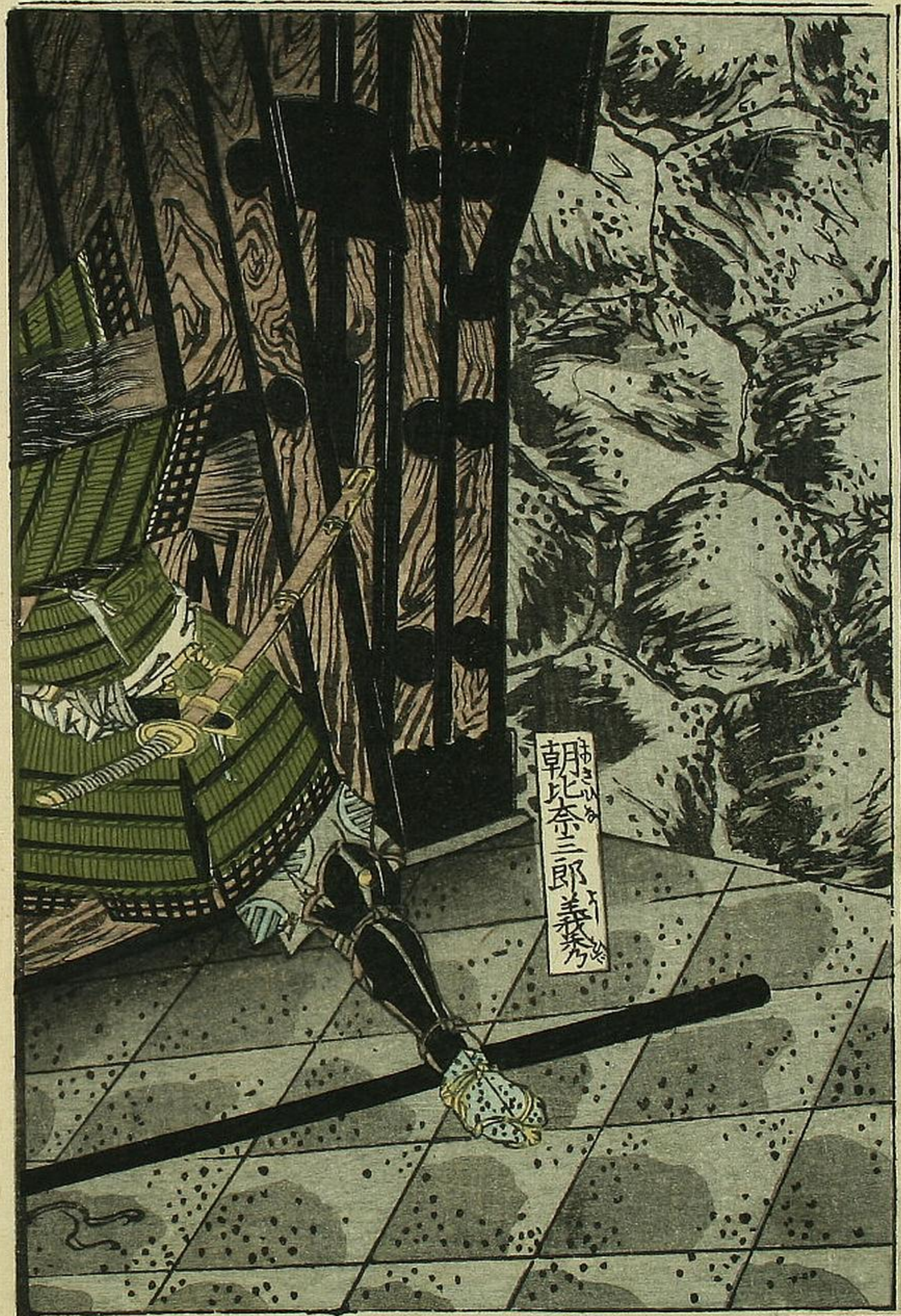
源忠顯

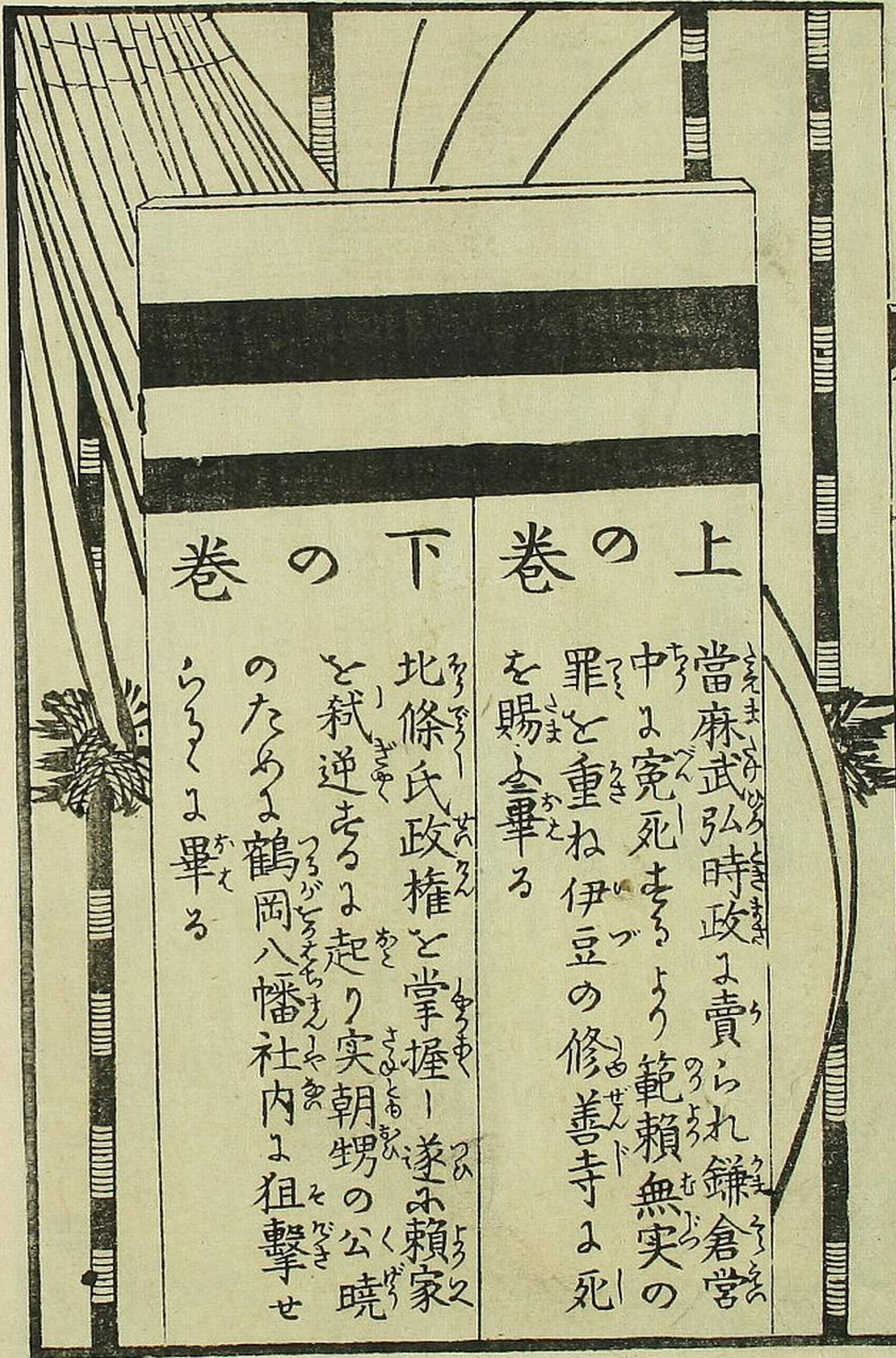
公曉



内府實朝公

此子絶也
源氏之血統
骨肉相齒也





巻の上

當麻武弘時政は賣られ鎌倉宮
中より寛死するより範頼無実の
罪と重ね伊豆の修善寺に死
を賜ふ事なる

巻の下

北條氏政権と掌握し遂に頼家
と弑逆するに起り実朝甥の公暁
のためは鶴岡八幡社内は狙撃せ
らるるに事なる

通俗 日本小史五編之上

東京

染崎延房檢閲
渡邊文京操觚

却つて説く當麻太郎武弘は主君範頼が冤罪と
いふを釋くべき便宜を得んと賢者を欺むく大奸
人北條時政が肱股と頼むかの基勝は鈍くも賣ら
る夜まゝに宮門の背面を徘徊し隙を窺ふ
程頃八月十日の夜風雨は紛して鎌倉の宮中
に潜び入り寢殿の床の下に躬を屈まし耳を敲て

窺へば夜詰の未ぞゆけぎまたりよの夜宿直の近
 臣へ北條時政が子江間小四郎義時結城七郎朝光
 海野太郎幸氏より頼朝卿への夜若冠等ふ雙陸
 と打つて商へ興へ入り更闇まども卧たすむ
 かまろ一程の當麻太郎も志のぶとまれど昨今よ
 り些一邪氣よ犯されたるよ甲夜より床の下ふ伏
 して更よ濕氣を受しうの呷き出でとまらむ袖
 のて口と掩へども内より頻りふせえ上て志のぶよ
 堪む咳けバ義時をやくも聞附て怪しや下よ曲漢在

まとりよ入主従うち駭き頼朝卿へ潜びやうふ義
 時を將て次の間へ御座を換させたまへ朝光幸
 氏より手をわけて席薦を反除け床を放せば果
 て下よ伏したる者ありき却て手燭の光りよ逃
 んとまらぬ朝光へ曲漢等と呼びかけに跳りこぎ
 つく無手と組むさへは當麻へ力士あり突よ挑
 争そり組伏するも易うくなれど頭をれらるふ
 おそと惑ひて揮ち逃んとて進退まじく途を
 失ひ獵場の獣と身と搔問バ幸氏まこと累りく

朝光よ力を裁し索と被んとまろ程に義時の邊を
 一く走りかへつ信と見て提げ長刀さうのふて
 當麻が左の腋腹をさうまむんと劈け忽ちさら
 と漬しる鮮血と共に武弘の懐刀と抜けさう長
 刀の柄と斬おと一嗚呼こが思ひ浅くして基勝
 よ賣らまたりと言せを果を朝光の刃と取らんと
 のが蒐つて右の腕と捻あぐれを慙をトとわ
 思ひらん躄て左へ持入る咽吭かた切死んでさう
 曲漢自殺さう一う朝光幸氏怒りふ堪む正る

う候ふ小四郎どの吾們既よを累りて索と掛
 んとせしもの我怒りよ瘡と負したまふを食議の
 蔓と失ふひぬと敷圍の冷笑ひ嗚呼あるあう我
 言むるそののうる和殿等力足らむしてかろ大
 事の白漢とさう逃さんとあう一うをさや浅瘡
 を負せしふ尚搦ぬ獲ざり一とて義時が知るあ
 うのとゆふ朝光幸氏の憎しと思へと先輩あり
 政子時政等ふ憚りを再ひあきと諍を只さうく
 と咳きく躄て死骸を挽出せば頼朝も間ちうと立

まがう何奴あるうと見て何を怪しむへいあ
曲漢の主從豫て見知りたる範頼の郎黨當麻太郎
武弘ありそが帯たりし七首のかん父左典廐義朝
の遺念とて範頼年来秘藏の名刀焼刃のみをひ勝
まなれを伽羅丸と名けりし一又あかの當麻の力士
なり弓箭器械間牒の術固より未熟のころあつた
今あのみを身よ帯て卧房の下に躲ひつる裕とい
ひ恰といひあつた必を範頼が予と刺せんとて潜
たる絆問てして顯然たり嗚呼危ううと只管ふ

嗟嘆して疾視たすみ眼中に堪ぬ気色を顕はせ
も毫たの里も騒ぎたすの義時等三人の近臣
を勞らひたす人を絆たり遠侍に聞えて内外齊一
く騒ぎたすあか黨類のわうん欵とて燭を兼り闇
を照して書院庭面築垣の隈なくあされを雨雲の
霽月ゆくまふ秋の夜の長きもあつた明しり然
まともあかの事と沙汰まふのうむと觸示し秘密
ふ事と處せしや名直寝せしものあつた知る
より絶えりし一ふ義時が告たりん時政一人

祇候して無異を祝し奉つとを頼朝卿の潛やうふ
 近臣と遠離たもう時政を招きよせ密談時を移
 一々去るどふ範頼朝臣の憑きまらたる當麻太
 郎の病気の由を申して密談いまも定りあり老如
 何ふくと待てびつ一日二日と送るうち忽ち
 營中より時政廣元が連署の徴状到来して火急に
 召させたまひしを範頼の忙たるしく郎黨を召
 集へる如此々々の事よみん吉凶定りたる糸ども
 武弘既も基勝も便りて愁訴の趣きを告ぐ相

州殊よ憐しとて幕下よ執成奉つり勘気恩免の御
 沙汰あるべしと又他事も多く宣へる老臣等爵を擧
 め異口同音まをせやう君曉りたまひむや當麻の勇
 りれども智謀も大事の密議を奉たりるが
 病むと稱しる籠居るむむの事ありざる故みらそ
 先づ武弘を召させたまひその消息を問たまふ
 否夫もも候むらば當家の危窮あり在りよ
 も角ても枉寛の神の崇り今さらば攘ふべき道な
 きもの虚々出仕したまへる釜中の魚とあらんよ

田村山 五



當麻太郎
鎌倉宮中
寛死



り只夫の館たねに楯籠たてかごりて安危あんきを決きめたまふと各自各自意いを述のへ利害りきがいを説とき面おもてを犯おとして諫いさめれば範頼のりより怒いらりし声こゑあつ立たてりては毫ちとをりまし野や心こゝろまし諛うそ者ものの舌したふ苦くしめらし鴟夷しゆいの皮くわりて盛もらしとも猛まうは逆意さかと企こころて家兄いへふ對たいして弓ゆみと彎まんや君命きみのみことトて召めせしたらんは駕かと待まちびて也やくとりり何なんう躊躇ちうじゆあらずん疾は俱ともごとの準備ようびをせまとり只管ひたすら忙いそがしたまふふふふふ廣通くわうちゆうと重能じゆうのうの言ことの諫いさめめからし然しか見みるる共とも一いっ嘆たん息いき一いっ高保かうほと有友あゆの主ぬしの後方のちのうへふ追おひきりましし諫いさめんと

挽ひとりる袂たもとと弗なと揮拂ひらふ風かぜは柳やなぎの画障子ゑまがしと推開おて急いそぎ後堂のちのどうへぞ入いりたまふんば又また詮術せんじゆつのならずら是こゝは於おて四よ個こゝの老臣らうしん等らの顔かほと合あはせて商議しやうぎ一いっ廣通くわうちゆう重じゆう能のうの主君ぬしは俱ともして營中えいぢゆうへ参まるべし高保かうほ有友あゆの御館みたねを預あづかりし留守くしゆせんとて内外うちとそとの用意よういをまんと油断あぶのせきりりる痛いたましたるる範頼のりより朝臣あそへ一いっ生涯しやうがの大厄おほ難がたあらひし日ひは迫せまりて釜中かまぢゆうの魚屠うと所ところの羊ひつとあるよしを些すこし思おもひ測はかりまして時政ときまさが好意こういは依より鎌倉かまくら殿とのの御疑みぎ念解ねんげり稍恩免しやうおんめんのおん使つかひと賜たまはしりましと

思ひさうそ老臣等が諫めと聴き平生よりおりと
花美より従者さへは装へし宮中へ趣きたまへば
時政が一族ありける 稲毛三郎重成兵士のまゝ従へ
て若宮巷路より出迎へ矢庭に範頼主従と失々と推
らり籠め鎌倉どの御説あり伊豆の修禪寺へ入と
奉つとと重成仰せと承まへしと此処より待と久し
誘たまふと急ぐを範頼とと聞あへて吾毫も
もを逆心なり何れのが申し掠めて再度のおん咎と
蒙りたる免み角みも推参してお疑ひと申し

釋べし枉て途と開き候らといと忙てたる声色よ
てらを返しつと勸解たまふを稲毛三郎冷笑し重成
かゝ候らへば此所より先へ一歩も赦しまはらさ
ざりもあらざ諸も無益の諄言うるといと戒厳しく
窘むると範頼はあつ辞と竭して和解んとせし程よ
後方は従ふ重能は遠へし進とよりて君の袂と
引動し斯あると一と廣通等が豫てよりまをせし
事なりよの期よ及びし百千遍陳トたまふ由る
き所為歎所詮嚴命よ従ふるあり更し修禪

寺へ赴おもむうせたまふむ何なと以もつて逆謀さか謀りた張明ちやうめい
 たまらん是これを御運ごんのまゝとを思おもひ奉まもつ候まじへ
 と番ばんびやのふ諫いさむまの範頼のりより頗まは嗟嘆さたんして遂つひは再また
 と争あひたまふを當下このとき稻毛いなぎ三郎さんじやうへ兵士へいしと促うながし
 昇あせ来きたる張輿ちやういへ範頼のりより朝臣あそみと移うつり乗のせどく行ゆ
 と急いそぐ立たつ範頼のりよりの従士じゆし等らの呆あき果はてせん方かた
 ありむ皆みなあつの所ところは抑留おさへりせしと主君しゆきんの俱ともみ立たつ
 能よくその中なかは重能じゆのり等ら郎黨らうたうすく六七はち人君ひときみの先まへ
 途みちと見るあとをくむ爰こゝより割腹せつぷくせんと云いふ

此こゝ彼か必死かならずしの面魂おもたま悔あやりがらや思おもひらん重成じゆぢやう僅すこく
 あり等らと許ゆるして輿いの後方のちに立たせしを現げんし人間にんげん
 の栄枯さかたふ得失とくしつ今いまもそとめぬ事こともあらうまのふ幕下まくか
 の連枝れんぢとて車馬くるま門前かどまへに市いちとなすを在ある鎌倉かまくらの大小おほこほ
 名愛敬なあいけい渴仰かつげう仰あがせざるもまゝ今日けふを羨里せんりの囚徒しゆとと
 里さとをさぶれを恩顧おんこのそのも憂うれへと俱ともまする者もの
 稀まれよて親おやしき武士ぶしも顧こらむ裕ゆとりひ恰さとひ歎なげ
 き真蘇枋まそがの繁さか芒き尾花おしなが袖そでに置露おきるの乾くく隙ひまもた
 秋あきの天あまかろり果はたる旅宿りやくにて足柄あしは起おこよその夜よと明あ

當下高保有友の焰の下と搔くを後堂へ走り行
きて範頼の夫人及び孺君と尋ぬとどち焼死し
たまひる影ぞみ見えねば兩人の心頻りふ焦立つ
敵内外は充満て刺さる猛火は包まれなれを落し
まわすま術もあらず只あの上を夫人孺君は自殺を
勧め奉りつる死出三途のおん俱と思ひしは依
情を煙りよ喫とる失たまひし欲將も敵を囚
むねく欲あを儘うて只や止ん今一戦け散り
ておん往方と索孫んといふを有友のふみあ及ぶと

應へく躰て出んとする兩個が間へ瓦落々々と落
る長押と薙刀のて受て倒せを発と散る火花は似
たる葉武者ども煙りのうちみ乱と入り撃んとま
ろと高保有友右左よ受流し兩人ひとりく閃めろ
ま刃の下は彼軍兵等が首の飛で礮と落ついと毛
烈しき太刀風よなうや燃移る火氣煽々あかまの
トと寄手の軍兵逃るとやトと追蒐る前面は落
る梁は有友の肩とらるる半身既焼爛れ扶け
起さんとする高保の篋子よ足と踏落し火燃の



高保有友の
 西雄宿の宿の
 館に戦死す



中ちゆう不ふ礮たうと座ざ一いつあらら口くち惜しやくや無む念ねんやと迭たがひよ声こゑをかえせ
ど毛もう腹はら切きる隙ひまもあらうをあらえと一いつ世せの功こう名なも夢ゆめ
のゆゆく多おほと立たつる是こゝや長ちやう安あん三さん月げつの烟えんを細こむ両りやう雄ゆう
る数すう寄きと盡つせ一いつ大たい廈げうとどのふ灰はい燼じんとあらうと失うふ
らを是こゝふ續ついく宗しゆ徒との武ぶ士しの戦せん死し一いつ隣りんむべ一いつ夫あ
人かみ儒にう君きみと始はり婦によ人にん幼こ童どうの烟えんりふ哽おどび火ひは焼やれて死し
まらるるその幾いく干かんとのみを知しらる辛つらくして脱だれしの雜ざ
兵へい等とうふも稀まれありらう案あん下げ某ま生せい再さい説せ範はん頼らい朝あ臣しんを思おも
ひげけるく又またさらうは修しゆ禪ぜん寺じへ閑かん居ぐらる日ひ影かげまらるる

る露るの身みと置おく処ところあらはるのうう稻い毛ま三さん郎らう重ちゆう成せいハ
その日ひより影かげ兵へい等とう一いつと前まへ後ごの門かどを固かめらせ庫く裡り
方ちゆう丈じやう客きやく殿てんさら間まなく時ときなくらち廻まはるをさしも名な
たらるる讚さん佛ぶつ場じやうも只ただかの地ぢ獄ごくよ異いあらうを重ちゆう詔しよ廣くわう通つう
等らう近きん習じゆの侍さむらいたらたらよらう孫まごと目めとあらげ口くちと開ひらきて
慰なぐさめらしをまらはるとも叶かなはる君きみ臣しん憂うれ苦くよ日ひ夜や重ちゆうね
て五ご六りく日にちと経へる程ほどよその旦あした當あた寺じの住ぢゆう持ぢへ常つねより
も叮てい嚙がつよ範はん頼らい主しゆ従じゆと管くわん待たいてらうらう熱ねつ居ぐの憂うれ
苦くと慰なぐさめらさしてらうらう今日けふの鎌かま倉くらよりらうらう謀まう使し来らい臨りんあ

るべきより豫てその沙汰候らひきらち箆りての
 と在せしを垢つたど殊更に憔悴させたまひしけ
 りかん浴候らんか抑々當寺の温泉の萬病疾
 治せざるあとなり山門の前ある川の真中より湧出
 るを獨鈷の湯と呼び倣せりむり高野の大師當國
 は券縁の折らぬの地の温暖あるとゆへ國民多く
 濕毒と病と煩らふと隣里にて奥の岩窟より箆り
 加持したまふと七日七夜拿たる獨鈷と投たま
 へたあの山川に礫とおらそ其処より温泉湧出せ

たり後里人石をりて大きき獨鈷を作り件の温
 泉の邊に建て云々と名けたり加之あるを川の上
 下所々よ出る湯あり石を疊置して湯橋とせ細小
 して人浴がたいた牛馬の足を洗ふなり今なら土地
 よ益あるよと是凡人の上のよをうむ牛馬六畜庇
 り成蒙むる大師の恩徳莫大あり現に手と浸し
 試するよ間僅ふ三四寸外面に冷水あり其處より
 うちの温湯あり不思議のよとよ候らんむら當國
 なる熱海の温泉の朝な夕なふ時を定めて海潮の中

より湧出とて懸て熱海と名づけけり唐土雞籠山澗中の
 の潮粗とよと似たりとぞ又江乘縣より出る温泉
 の半冷うふして半熱一とらふれども我獨銛
 の温泉の類よゆるまどと覺え候らふと精細よ談
 ぢらる範頼朝臣うち聞て現よ逝そのと流る水
 を夜とみる日とまぐみたるあとなり又彼泉の温
 うたと冷あるの生死よ似たり今日へを範頼が
 冷泉よ入る時あるべし禍神の崇りみや身の濡衣
 と乾衣をむら後まきの恨もなまはとも佛縁ありて

靈場よ終り成らるへせめてその幸とあを覺ゆ
 と不二法門の不可思議ある今ふ始めぬ事なぐら
 身の憂き時に尊さの八志をよまきと忝けり先
 だちとる者ともが待とびる候らるん恚とべ一蓮
 托生の引接を憑むのと他事もなく候らふと
 正首よ田舎たより覺悟の弊よらうをれてつと
 哀とよ聞えしうへ住持はいよ、叮嚀よ一念即身
 即佛の功力と勸めたるもひらう秋の日影の短うて
 未のりやと下る頃談使入来と呼つぐ声み外面俄

頃よさうに立ち稲毛が家臣み案内させて詰来るも
の狩野久祐茂佐美三郎茂光あり間毎く先と追
しつとや客殿より進み入り預り人稲毛三郎の外面
を護るまるといひおもはれ範頼の禮服整へて
恭々しく出むる平伏させば祐茂の大紋の袖の
ま合せ抑々此度吾侪兩人おん使と奉まつりて発向
せし別義よりいふに範頼席を更め手と
着き頭を低たまふに祐茂の茂光は會釈して小膝
と進み談意の趣き別義よりいふに参州ふこの月

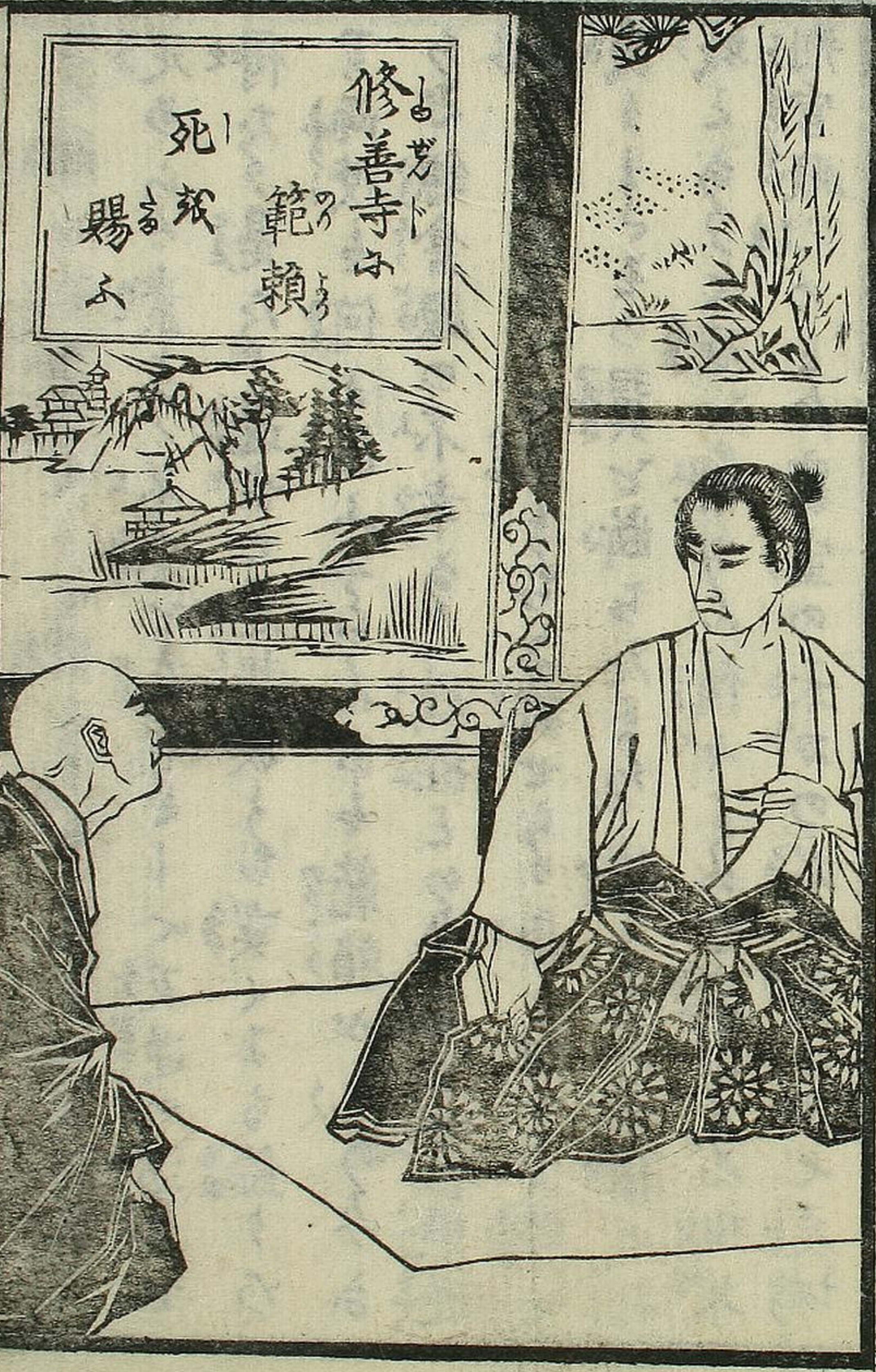
はら逆謀の聞えり然りと雖も骨肉たり又年来
の軍功の事を明々地は虚実と正し深くその非と
処めたまふに唯後來と懲さんたりと對面との
許さざるに逆心まなく止むとたたく家臣當麻
太郎とめて幕下と害し奉まつると飽まを伎倆
る事発頭して當麻の即座に誅せらる勿論その夜
の為体當麻の浅瘻を負い脱ぎ去りと思ひん
そが自殺しつれを渠口づつ君の悪事と白状
あつるよゆゆ孫とも渠が帯たる七首の伽羅丸と

名けたる参州の重寶たり原是かん父左典廐よ
 り相傳の名刀なりれば幕下も認りてを乞ふも
 裕とりひ恰とりひ問はむして参州の逆謀既み明
 白たり若し是を乞ふも忍ぶべくも何とりて天下よ
 示さん王事監あつる公道よ親疎ゆるんやまの
 故よ濱の宿の館へも撃手の武士と向けられて宗
 徒の郎黨よふ撃まぬ曩よ國務と許されたる室
 飯の城地と召放し彼七首と返し下さるおん覺悟
 候らうと言ふ女まゝ述より當下宇佐美茂光の

推乃へ来まる白木の函よりかの伽羅丸ととり出して
 左右と屹度見よ之をば縮毛の家臣等あつる得て
 足打の三方よ件の刃とうち載せつ範頼が前へぞ
 居たりる時よ左手の腰障子とよつくと推開き
 て江口廣通属重能等忠義よ凝る郎黨七人よふ
 禮服よ威儀と整へ大床よ並びて居り兩使へとを
 見觀りて何者ありやと誰可まばる諸共よ頭と低
 げあつて参州恩顧のそのよ江口廣通属重能磯見
 貞幸栗野元廣矢矧景氏五十嵐季宗菊地良正等

主君の先途心りこなく推参し候らむ一が黄泉
の俱をせまひさふ傍近く祇候せりおん許しを蒙
あつたりとりのを祐茂うち點頭き現し参州ハ幕下
の連技一國の受領よりよやその罪ゆりとそを死
よ殉ぐ入るも死たうらばやると問へを茂光沈吟ト
てあま等の事の事ハ某由豫て覚悟とせざれども後難
を憚りて許さばいなりくよ武士の情と知らぬよ
似たり彼等と近く侍らしたまふとりの声聞て廣
通等の忝けなりと應つあそむく席とすめと主

の左右に居流きたりかき程に範頼ハかの伽羅
丸の七首を左手に取りとらちめん一打返して見て
右手に取らぬの期に及び毫むも申し譯く
べきよりハつらと終に家臣當麻武弘が營中へ推参
せし事の範頼絶てあまとあまを但件の武弘ハ執
権の家臣たる某甲よ所縁ありあまらよ就て打
嘆き恩免の沙汰なりやふしや密に問をやとりの
しる應てその議に任せし又あまの伽羅丸の七
首ハ聊の賞を由りて當麻太郎よ取せしが是



さへ緯の証憑とありて欲するもその範頼が逆謀よ
定めらる素より不忠と存せざりて及逆の汚名と
得たり是た過世の悪報歎ち嘆くはも餘りや
且兩使を何と思ふやらんあま範頼が上のみま
らむ鎌倉殿の不幸より義経とのみ吾とのみ順逆
定めありて忽ちみ裁せらる身づらう枝と
伐りまその翼と断ちたまら誰うま子孫の杆
城とありて寇と禦ぐん情々そのと案ざるは祖父
判官殿のとな家室の太刀の名と更とありて友切

とせらるる故歎保元の播乱は父子兄弟戦ひたまひ
き憐て古兄源太のぬ一戦の叔父帯刀賢と撃たまひ
ぬまの後平治の兵乱より頼政ひより平氏に属て一
族の義と顧みん文治より義経撃れ今茲に範頼死
と賜へり聖いまま誰が上あるん一家の臭い説べり
らむ先祖の過失の論をべくは範頼實は野心な
しその罪よりせりて管叔の罰と被むるを怨め
しとの思をねども子孫の杆城と喪あひたまへ逆
臣をさく隙と窺ひ幕下百年の後よりくを若

くハ諸呂の禍害の如くん吾呉子胥目が才たうこれ無
きまでも東門は眼とけけ見るようけけ孫と先靈
誠と監とて不幸と殺とと処めたる幕下の子孫
あの寺は終りとらるもの何やもやせん悲しくなる
膝の上は柄の立たる七首と睨へつめく身とらるハ
鬱憤気色は見えたり鳥の死にとまるると死よその
鳴あといと悲しく人の將は死にとまるると死よその
言あと善とまん範頼先見のりよあけ終と最期の金
言果せる哉あはとう有二年経る元文元年秋七

月十八日の事とよ頼朝の嫡男頼家朝臣を権を
北條は奪を奪くまの修禪寺へ推筆られ浴室の中
うく害せらる輪廻報忍るべし問話休題且らく
一七範頼はまゝ祐茂等よりち向ひ女々しき詩言今
さよよ命を惜むそのとやゆを是ん兩使篤と見届
け候らへといひけけ白無垢の袷の襟と推ゆる
二ツ三ツよの祖ぬぐ衣より白き膚を露ハ
かの七首とわい戴き双を袖は巻きそんる氷ま
刀尖を左の肚へぐさるとして小膝と突きく右の方

へ一文字よ引たきへを鮮血さつと漬りて雪を
欺むく白夾衣の飾磨の紅褐と染ませり後れいせ
トと廣通重能又と逆手よ抜きあらしく腹を切
りて俯せりて磯見負幸名栗元廣矢矧菊川五十嵐
季宗腹十文字よ切るもりり或はまて刺ちづり刺ちか
へくぞ俯し累ある君臣八人筭を乱して屍の秋葉の
霜よ散しき血をまき野徑の花よ似たり三寸息絶
れを万事休を旅魂今夜の宿よ入るらんと覺
えて最由良とあり」此歳十一月頼朝相摸守源惟

義と奉幣使として良馬千頭と尾張の熱田社に献む
五年八月遠江守安田義定ある者兵を挙げて無倉ふ
叛く事の起源と尋ぬるは其昔義定軍よ義経よ
従ひ轉戦頻し功と奏し功臣の隨一たりしがその子
義資罪を犯して斬首せられ父義定由連坐せられ應
て采地と没收さき一依憤懣を以て逆意を企て事の
あし及びたりしが幾程もなく勢ひ尽て遂に誅よ
伏しなり九年正月天皇位と皇太子よ讓りたまふ
皇子為仁親王立つ是と土御門天皇とりし是より先

頼朝三郎重成台命と奉トて相摸川の橋を修繕し其
功と竣一々頼朝親ら臨みて落成の勞と慰め式を
行ふる歸る途中過つて馬より墮ち脾腹を酷く毆
ちたり一が夫より遂に病作り藥餌祈禱もその効
なく明とば正治元年正月十日黄ある泉に赴きて敢
なく鬼籍に入りたまふ享年五十有三初め頼朝三
十三の秋流竄の身と以て兵と伊豆に起し石橋山に
義旗の風草木も靡く天下の名將あまのかの平相厚清
盛に比せざる其功渠より大あるも其罪も渠より大

ありとを什麼みと尋ねるふ頼朝口は蜜のりて心は
残忍の刃と會と義仲の惡と瘡ち平氏の暴と懲ま
即ちその功の大なるものあり然るも天子と陽尊一
覇府と鎌倉に開きて天下を專制し惟り政權と掌握
を其功その罪孰まら大なる後遂に北條氏に其權を
奪つる猶三卿の晋に於る田氏の齊に於るがごとく
曾子曰く爾よ出る者へ爾よ返ると夫之の謂歟詔
のりて長子頼家とりて征夷大將軍と襲しめ從二
位に叙せらる頼家時十八暗愚淫逸女色よあふと

頼朝三郎重成台命と奉トて相摸川の橋を修繕し其功と竣一々頼朝親ら臨みて落成の勞と慰め式を行ふる歸る途中過つて馬より墮ち脾腹を酷く毆ちたり一が夫より遂に病作り藥餌祈禱もその効なく明とば正治元年正月十日黄ある泉に赴きて敢なく鬼籍に入りたまふ享年五十有三初め頼朝三十三の秋流竄の身と以て兵と伊豆に起し石橋山に義旗の風草木も靡く天下の名將あまのかの平相厚清盛に比せざる其功渠より大あるも其罪も渠より大

頼朝三郎重成台命と奉トて相摸川の橋を修繕し其功と竣一々頼朝親ら臨みて落成の勞と慰め式を行ふる歸る途中過つて馬より墮ち脾腹を酷く毆ちたり一が夫より遂に病作り藥餌祈禱もその効なく明とば正治元年正月十日黄ある泉に赴きて敢なく鬼籍に入りたまふ享年五十有三初め頼朝三十三の秋流竄の身と以て兵と伊豆に起し石橋山に義旗の風草木も靡く天下の名將あまのかの平相厚清盛に比せざる其功渠より大あるも其罪も渠より大

奢イヤ侈チと極キョクふ嘗ツラフて國家クニカと顧慮コソを間マと得エたりと北キタ
 條ジョウ時トキ政セイ外ガイ祖ソの威權イケン君キミと凌シノぎ事コト大小ダイコウとままく時トキ政セイは決ケツ
 是コトは於オて新シンの問注モンチュウ所ショと作ツクり三好善信サンコウゼンシン執事シツジと
 其他ソノト大江廣元オホエノヒロノリ三浦義澄ミウラノヨシノリ八田知家ヤチノチノカ和田義盛ワタノヨシノリ梶原景時カシハラノキマサトキ
 比企能貞ヒキノノブサダ安達盛長ヤシタノモリノサダ等トナリ其政務コノセイムは関與カンウせり

通日本小史五編之上終

010190512911

